

吉川英梨

2020年1月某日、私は『海蝶』に出てくる巡視船「おきつ」の取材のため、新幹線で静岡県清水市に向かいました。

約束の時間に清水海上保安部を訪ねると、すぐさま部長執務室に通され、当時の田中裕二部長とご挨拶。すぐに巡視船「おきつ」の取材へ。『海蝶』で、主人公の父親が潜水班長を務めているという設定の船です。OICに潜水士を集めて下さり、ここで詳しく潜水士の日常や訓練内容、潜水機材、船内の様子を教えてもらいました。

13時からアボを取り、14時半ごろには巡視船「おきつ」の取材が終わったのですが「午後は吉川さん対応に予定をあけていたので、なんでも聞いていただきます」と田中部長。

海上保安官の「公務員っぽくない」理由は？

私はずっと気になっていたことを尋ねてみました。

「海上保安官って公務員っぽくないですよね。前例、慣例にとられず、行く先々で自分ができることを探して、業務をよりよくするため試行錯誤しているという感じがします」

民間人からすると、公務員は前例・慣例に縛られる、融通が利かない、というイメージがあります。小説でもそのように描かれることが多いです。警察組織を物語の中で描くとき、「組織に縛られない」「慣例にとられない」人が主人公になりやすいのですが、それは公的機関が、そういった人物がキャラ立ちしやすい『ハコ』でもあるからだろうと思います。

「海上保安官ってそういう人が少ないイメージです。異動で新たな立場になったときに、前任者の仕事を踏襲するだけでなく自分なりに開拓していこうとする人が多い気がします。その気

取材は気づくと日没に…



質はどこからくるんでしょうね？」

田中部長はさらりと答えました。

「陸と海の勤務を交互に繰り返しているからでしょうかねえ？」

巡視船艇に乗って一度海に出ると、なにがあるかわからな

い。船の突然の故障に見舞われたとき、突然潮の流れが変わったとき、天気が急変したとき――。

「誰も助けてくれない。自分たちでどうにかするしかない。そのテンションのまま陸へ異動になったとき、ものすごく戸惑う。ようは、物足りないんです

よ。だからいろいろやろう、試してみようとしちゃうんですかね？」

田中部長は関西弁を交え、面白おかしく実例を交えながら話してくださったのですが、要約すると上記のようなニュアンスだったと思います。

前のめりに聞いていた私は、長らくの疑問が心にすんと落ちすぎて、納得を通り過ぎて感涙したのを覚えています。

これまで多種多様な職業の人物を書いてきていますが、これほどまでに職業人の「気質」に迫ることができたのは作家として極上の喜びでもありました。

そんなこんなで田中部長と話し込んでいたとき、窓の外を見て、「あっ！」

もう日が沈んでいました。17時を過ぎています。一体何時間話し込んでいたのか(笑)

田中元部長を始め、清水海上保安部のみなさま、当時は本当にありがとうございました。

(つづく)

「陸と海の勤務を交互に繰り返しているからかも」